



いとう  
**伊藤みどり**さん  
(関西生命線代表)



## 共生は互いの文化を “混ぜる”ことから始まる

### 異文化の社会で暮らす孤独

伊藤みどりさんは台湾で生まれ育った。台湾の「いのちの電話」でソーシャルワーカーとして働いていたが、日本人男性と結婚し、1977年に来日。翌年には「帰化」して日本国籍を取得して、ふたりの娘にも恵まれた。夫は異国で暮らすことになった妻を気遣い、家事や育児にも協力してくれる。しかし、言葉も文化も価値観も違う社会での生活や子育ては想像以上に困難で孤独だった。

「どこへも逃げられず、精一杯生きるしかなかった。こうした経験から、子どもがある程度大きくなったら、少しでも人のために役立つことをしたいという夢をもちました」

1980年代は多くのアジア女性たちが出稼ぎのために来日し、「ジャパゆきさん」と呼ばれた。そんななか、2日続けて計4人の台湾女性が道頓堀川に飛び込み、うち1人が死亡するという事件が起きた。

「新聞記事を読んで、本当に心が痛みました。もし悩みを打ち明ける場があれば、自殺を防ぐことができたんじゃないかと」

1987年、台湾に里帰りした伊藤さんはかつての職場を訪ね、「日本でも“いのちの電話”をやりたい」とねばり強く協力を求めた。一方で、日本の新聞に投稿するなどして自分の思いを発信した。何の力ももたない「主婦」の立場で、社会的な事業を立ち上げるのは容易ではない。しかしそうせずにはいられない切迫感と「困っている人の力になりたい」という強い思いが伊藤さんを後押しした。

### 違いを認め合い、学びあう姿勢を

1990年11月、「関西生命線」がスタートした。電話相談が中心で、必要に応じて医療機関や弁護士へつなぐ。すべて無償のボランティアで行い、事務所は伊藤さんの自宅の一角だ。スタート当初は留学生から

の相談が大半を占めたが、現在は国際結婚で来日した人やその家族からの相談が目立つ。

「まず日本人の夫が相談してくるケースが多いですね。面談すると、夫の顔に傷があることも。追い詰められた妻が家のなかで暴れるんです。こうなると治療が必要なので、家族と相談しながら慎重に医療へつなぎます」

雑巾の縫い方が分からない。リンゴの皮をむかずに丸かじりする。お弁当がつかれない（中国には弁当という習慣はなく、その言葉すらない）。自己主張がはっきりしていて、必要であれば反論をするなど。文化や価値観、民族性の違いを「本人のせい」にされ、非難される。家族のなかで孤立し、追い詰められた末に心を病む人が後を絶たない。相談をしてきた人のうち1割強が「自殺を考えた」と話している。

「日本人はチームワークを大事にする。だからこそ今の日本の発展があります。一方、中国人は個人主義で自己主張が強い。いいか悪いかではなく、民族性の違いなのです。家族はもちろん、地域や学校でも違いを認め合い、学びあう気持ちをもってほしいのです」

さらに伊藤さんは力をこめて話す。「共生とは文化を混ぜること。混ぜれば自分の文化を捨てなくてもいいし、相手の文化もわかるでしょう」。少数派の文化も切り捨てない社会こそが、豊かな文化をもっていると言えるのである。



## 関西生命線

台湾語と北京語によるいのちの電話

相談電話 06-6441-9595

相談日時 火・木・土 午前10時～午後7時

URL <http://www.geocities.jp/kansaiseimeisen/>